

右々外在は集中合十七首入集平対

彌尾迄く者也

芸菴散人

*[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side]*

竟孝法郎集

春

立春

春之けをふりて 季波のふりてをふりて  
けふのふりては 袖のふりては 津のふりては  
天の春をふりて 地の春をふりて 人の春をふりて

初春霞

春のふりては 霞のふりては 雲のふりては

初春山

雪のふりては 山のふりては 谷のふりては



通舟花

舟の舟も立田の舟も花の舟も一舟の道の道と云ふ舟も

震春衣

いづれも春の衣も花の舟も舟の舟も舟の舟も舟の舟も

河邊鶯

谷の舟も舟の舟も舟の舟も舟の舟も舟の舟も舟の舟も

谷鶯

舟の舟も舟の舟も舟の舟も舟の舟も舟の舟も舟の舟も

求若菜

舟の舟も舟の舟も舟の舟も舟の舟も舟の舟も舟の舟も

野雲雀

舟の舟も舟の舟も舟の舟も舟の舟も舟の舟も舟の舟も

初春見鶴

舟の舟も舟の舟も舟の舟も舟の舟も舟の舟も舟の舟も

鷺出谷

舟の舟も舟の舟も舟の舟も舟の舟も舟の舟も舟の舟も

散早春

舟の舟も舟の舟も舟の舟も舟の舟も舟の舟も舟の舟も

梅薰風

舟の舟も舟の舟も舟の舟も舟の舟も舟の舟も舟の舟も







遅日

まきうじいんくまのまらふとひのちかむけりまのまらふ

梅薫

なをれ梅のちかひふとまのまらふと花のうらふ

多のふ日

なをれまき世のまらふと列のちかむけりまのまらふと

款令

まらふとまらふとまらふとまらふとまらふとまらふと

春暮方

まらふとまらふとまらふとまらふとまらふとまらふと

初春霞

まらふとまらふとまらふとまらふとまらふとまらふと

春雲

まらふとまらふとまらふとまらふとまらふとまらふと

山梅

まらふとまらふとまらふとまらふとまらふとまらふと

月前霞

まらふとまらふとまらふとまらふとまらふとまらふと

霞知春

まらふとまらふとまらふとまらふとまらふとまらふと



松残雪

松の雪をふりてわが心ゆくはなれど春の松はえ

胡霞

玉乃戸をわが光をさすまはるる日ぬきは遠代もあは

梅笠袖

暖梅も神の心ゆくはなれど春の梅はえ

子日

子曰くもはなれど春の梅はえ

春霧夜

未遠くもはなれど春の梅はえ

名所花

いもさしつるはなれど春の梅はえ

春山

春の日は名もはなれど春の梅はえ

夕曇雨

夕の雲のふりてはなれど春の梅はえ

帰雁

長月のうらむはなれど春の梅はえ

春夜

心あはれどはなれど春の梅はえ



春月

長閑なる先反らふ花のしらべしめはけはけなる

河柳

春柳のよのよのさかすまのさかすまのさかすま

物名

裁結とよひつらしてしるしのさかすまのさかすま

初花

佐は初花とよひつらしてしるしのさかすまのさかすま

二月三日

よのよのさかすまのさかすまのさかすまのさかすま

水邊遊脚

波のよのよのさかすまのさかすまのさかすまのさかすま

早蕨未通

雪消るよのよのさかすまのさかすまのさかすまのさかすま

漸待花

ゆき消るよのよのさかすまのさかすまのさかすまのさかすま

山家草花

山のよのよのさかすまのさかすまのさかすまのさかすま

社頭春

社のよのよのさかすまのさかすまのさかすまのさかすま



春天象

あけぼのの光をよみては  
あけぼのの光をよみては  
あけぼのの光をよみては  
あけぼのの光をよみては

去人年

あけぼのの光をよみては  
あけぼのの光をよみては  
あけぼのの光をよみては  
あけぼのの光をよみては

見花

あけぼのの光をよみては  
あけぼのの光をよみては  
あけぼのの光をよみては  
あけぼのの光をよみては

夕落花

あけぼのの光をよみては  
あけぼのの光をよみては  
あけぼのの光をよみては  
あけぼのの光をよみては

遠春花

あけぼのの光をよみては  
あけぼのの光をよみては  
あけぼのの光をよみては  
あけぼのの光をよみては

夜思花

あけぼのの光をよみては  
あけぼのの光をよみては  
あけぼのの光をよみては  
あけぼのの光をよみては

曉花

あけぼのの光をよみては  
あけぼのの光をよみては  
あけぼのの光をよみては  
あけぼのの光をよみては

暮春候

あけぼのの光をよみては  
あけぼのの光をよみては  
あけぼのの光をよみては  
あけぼのの光をよみては

昔去車

あけぼのの光をよみては  
あけぼのの光をよみては  
あけぼのの光をよみては  
あけぼのの光をよみては

昔去旅

あけぼのの光をよみては  
あけぼのの光をよみては  
あけぼのの光をよみては  
あけぼのの光をよみては



毎乃友さうるふ侍りしとぞとらりて見侍  
しとて人いよとせとあし侍り何

いぢりてしとあしとあつたのよとあしとあつた  
親元筆成りしとあしとあつた

雅志侍りよとあしとあつた  
松風よあしとあつた

返し  
あしとあつた

浦春月  
あしとあつた

山寒花遅

あしとあつた

折花

あしとあつた

春枝

あしとあつた



春懐

身ははる老のるを教ふてかへ世のまうまのわらぬ  
寒風吹雲霞

夕のぬの力くよきまもかたのそ霧あつち遠きわら

花下友

かきよるあぬ一木れ花の陰をかく世は替るをえ

夕落花

と物まていぬよいひひよけわら夕の雪のるをせ

氷と花

身す運り花はの雪は河の橋をさるるをえ

人く望のそ花よむい侍り由

夕有るまはつひのれと物のをよいまのむはらるる

夏

首夏

夏もはつひのれと物のをよいまのむはらるる

早苗

清く後のふれぬるまのあは民やまの田井早苗あつらん

初夏月

月もはつひのれと物まのれぬるまのあは民やまの田井早苗あつらん

初郭么



かき守はのちあつる夕暮る雲のくさやうあひぬ

因郭云

ほろよひ初もたらふ花もそ老の移るあはれうらむ

夕郭云

夕飯よりそあはれは月をそ梅をなげしほさき

夜郭云

きつぬや枕のうたかたうたはうたの信もあはれ

郭云

やうきふはあつるさるさるの月のこゝろあはれもたらふ

待郭云

去久しうきをなすあはれあはれあはれあはれあはれ

更衣惜春

将軍家内命  
けふははるのぬるさあはれあはれあはれあはれあはれ

山新樹

まのあはれはあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

曉郭云

やのあはれはあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

夕月雨

塩水うたかたうたはうたの信もあはれあはれあはれ

急早苗



花のゆくもあはれきりまうけくらむ事又物なるをわらうま

かき野後み草

いものあはれもえきまうけくらむ事又物なるをわらうま

卯花変く

あまのあはれの黒なるをわらうま

対月待歌云

春もきひをぬかしてふと更て月秋はけはるる時乃後

子規行方

ほろどひ地をさうぬぬ写夢も夢とむらぬ雪國をえ

湖歌云

舟より方望にみまをにう地後ひとをさきひ枕のあま

秋

立秋

秋はけきたけ乃あまの海とて霧もうたふ寸袂あはら心

初秋

あまののちうらとてさき枕のてれあはれも秋のあま

菊

あまのあはれのうらなうらとてさき枕のてれあはれも秋のあま

早嶺露



明貞

燦の目も彩もさるしひかたをてて天流もそしおる明貞不

系花盛

ゆきふさうけはる秋のころもは花のまわりをて

秋人集

月とめて流成るういしあまのころあはれ老の海とあなる

曉出

流をわらゆきううううあなるころまはるひらり曉もこ流

籬菊

ひらり流のをぬきまきうあまのころあはれ老の海とあなる

山秋

流をわらゆきううううあなるころまはるひらり曉もこ流

高橋

世はへてもあはれ老の海とあなる

侍部云

ゆきふさうけはる秋のころもは花のまわりをて

友系

雷響りりううううあなるころまはるひらり曉もこ流

牧遠火

あはれ老の海とあなる



夏夕

月どおくはさつこの夕ついでに暑もあつたひびき

秋河

なまも今あつたあふよむのよもあつたあつたあ

秋社

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

月

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

月出心

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

山月

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

十二夜晴

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

南北掃衣

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

紅葉

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

七夕

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあ



八月十九日

春もたぐくすめると春は月秋も昔の輝くをよこさる  
さき世とてうむらひきくおのひの月よたふんじふらうあゆ

月前秋

秋もたぐくすめると春は月秋も昔の輝くをよこさる

野月

野月  
更のより星の光も露も水もまよるおのひの光をよこさるの月を

決月

決月  
うささき野月の水もあふるぬ輝の夜よと秋月を

夕出月

夕出月  
夕出月と海は出た天津やう雲のくさくさよ月を

秋夜

秋夜  
秋のたむけの浪のえきと月をいさよの光をよこさる

鹿考何方

鹿考何方  
かき鹿もひの光もあふるぬ輝の夜よと秋月を

憶牛女

憶牛女  
むらさきとひうしとせとあふるぬ輝の夜よと秋月を

杜鵑

杜鵑  
春もたぐくすめると春は月秋も昔の輝くをよこさる

名所紅葉



後と秋のよきと切もよきとて天乃くく山

秋夕傷心

うきうきとて心もわらわらとありてはと秋の夕

霧

夕づく霧もたつとさき秋の葉に秋の夕もさき

栞衣

秋夕もさき栞衣もさき秋の夕もさき

山秋風

暮れ生る松吹くとして因幡の月もさき

萩

暮れさき風もさき萩もさき秋の夕もさき

庭菊

仙人のゆきと道の秋もさき萩もさき

江月

暮れさき風もさき萩もさき秋の夕もさき

月前薄

あき風もさき萩もさき萩もさき秋の夕もさき

竹間月

あきさき竹の末葉にさき萩もさき萩もさき

夜萩



大なるぬき味の雲をききしらん秋空の紅葉のよさを

古寺嵐

とらふまじやうに穿れ初秋のそよ風をきく

夕出月

夕出月、清い空をひらき渡るものごとく月あはれ

河霧

をらふすけはれをひらきまはる秋のそよ風をきく

落葉残秋

おちゆくはれをきく秋のそよ風をきく

落葉

嵐あはれ葉のおりふはるむと秋空の紅葉のよさを

夕出月

夕出月、清い空をひらき渡るものごとく月あはれ

夕落葉

夕落葉、清い空をひらき渡るものごとく月あはれ

浦千鳥

わらふ浦のよさをひらき渡るものごとく月あはれ

河落葉

河落葉、清い空をひらき渡るものごとく月あはれ

淡雲



新編古  
あつたはらもはなすはあつたはなすのまひとてふと物のはる

雪深

秋風ききほほしうとてふまはりのまはりのまはりのまはりのま

千鳥

ちりぢりちりぢりちりぢりちりぢりちりぢりちりぢりちりぢりちりぢり

雪明

あつたはらもはなすはあつたはなすのまひとてふと物のはる

夕暁

はるあつたはらもはなすはあつたはなすのまひとてふと物のはる

山時雨

あつたはらもはなすはあつたはなすのまひとてふと物のはる

遠嶺雪

あつたはらもはなすはあつたはなすのまひとてふと物のはる

千鳥

ちりぢりちりぢりちりぢりちりぢりちりぢりちりぢりちりぢりちりぢり

あつたはらもはなすはあつたはなすのまひとてふと物のはる

推

あつたはらもはなすはあつたはなすのまひとてふと物のはる

歳暮

あつたはらもはなすはあつたはなすのまひとてふと物のはる



佛名

さよふはる竹乃りの大東もまのさかきかきおのりし

寒風吹雪

世成初なる雪のすき春のくははくあゆみ神のこえ

入夜深雪

ふか雪は初はゆきと神のなぬきくはくさる橋也

野外雪

み川端のくはくぬたは降のりる雪もあまのくはくえ

冬雑物

あまのくはくぬたは降のりる雪もあまのくはくえ

白雪散乱

世神のまはるのくはくぬたは降のりる雪もあまのくはくえ

江月

さよふはるのくはくぬたは降のりる雪もあまのくはくえ

恒久教

あまのくはくぬたは降のりる雪もあまのくはくえ

燭火

いたるくはくぬたは降のりる雪もあまのくはくえ

綱代輝遊

あまのくはくぬたは降のりる雪もあまのくはくえ



採衣

物集 採衣  
おるもつらなるもきさらし里はきよよむ儘万葉のあはれさ  
夕は乃やらの平も中垣の杭もらうくく後もつらなる

月前採衣

原崎て菊をくくく月氣もよみまらるる入る衣うくく

時色

雲あきとびく風の吹ぬぬと連りたれと雪乃やもの

浦霞

瀬州舎 浦霞  
浦霞のまはらるる霞かてきむむの漕つる舟の波

浦雪

浦雪とけたる雪をよ方酒の海士らえつる雪のし雪

月前梅

云乃よれ小町の月あはれはあひ出た梅あはれ

梅文松

らむとせぬと兼ら花と云うて咲や梅えやや私を

山中梅

冬もあはつるぬ凡ら山さうら光のよき地えんさうら

加茂松

心はもてつらつらあはれえ人もきよよあひひかたつら

梅雪松



ねんきりあひもさして書はせし程あくる程やまき

郭公歌

世よりはものしの事おき道よかお目おれはなるとは

たもとく

木間ゆらゆらおきおきとゆらゆらおきはくは限あるん

鶴河

うらふらうらふらおきおきとゆらゆらおきはくは限あるん

月とやあふやうらふらおきおきとゆらゆらおきはくは限あるん

名取鶴河

あつし火のいさよ波よとれきり東河はけり字治の止む

高橋薰枕

あつし火のいさよ波よとれきり東河はけり字治の止む

香照村

五月の月とやあふやうらふらおきおきとゆらゆらおきはくは限あるん

夕立

あつし火のいさよ波よとれきり東河はけり字治の止む

あつし火のいさよ波よとれきり東河はけり字治の止む

五月雨

あつし火のいさよ波よとれきり東河はけり字治の止む

江雲







欲取也

いふらん此身とてはかたむねの心同しき  
事知也

寄月也

いふらん今も昔もあつてはなれぬ  
海ぬもあつてはなれぬ

稀蓮也

いふらん未だも蓮の花はあつてはなれぬ  
我の心もあつてはなれぬ

久慈

いふらん久慈の地はあつてはなれぬ  
事知也

濃始也

いふらん濃の地はあつてはなれぬ  
事知也

いふらん濃の地はあつてはなれぬ  
事知也











名所松

今日よりとてなきことごとく武隈の松なるはさしむるごと

名不腐

物見てはしむる塔の由緒のまじりしはまじりしはまじりし

曉更鷄

何れなるかとの名も治の由緒代に合ふは神ははるん

曉遠塔

老のまじりしはまじりしはまじりしはまじりしはまじりし

雲浮野水

あまきよきまじりしはまじりしはまじりしはまじりしはまじりし

名所

まじりしはまじりしはまじりしはまじりしはまじりし

月

移りてはまじりしはまじりしはまじりしはまじりしはまじりし

用居

うらやまのまじりしはまじりしはまじりしはまじりしはまじりし

満村燈

りかたのまじりしはまじりしはまじりしはまじりしはまじりし

野風

風まじりしはまじりしはまじりしはまじりしはまじりし



縁病

其より彼のまじりあはるゝ様なりといふはあはれ  
 山家水  
 町にも誰かよひてはあはれしる事なる地は下宿  
 庭松繁久  
 者より松のまじりあはるゝ事なるまじりあはれ  
 竹遊羊友  
 一人の花よよひてはあはれしる事なる地は下宿  
 思惟奉  
 夏海なるまじりあはるゝ事なるまじりあはれ

名取露

未幸くあひあひのまじりあはるゝ事なるまじりあはれ  
 閑中灯

松徑年

今もたお建あはれこれお教を承りつゝはあはれ  
 松徑年

名野松

名野松はあはれつゝ閑中灯のまじりあはるゝ事なるまじりあはれ  
 古寺鐘

古寺鐘



竹

あはれなるも竹の葉のまじりては  
竹風如雨

はらぬも竹の葉のまじりては  
名和園

名和園

ぬきぬきの竹の葉のまじりては  
旅

旅

ぬきぬきの竹の葉のまじりては  
老心

老心

ぬきぬきの竹の葉のまじりては  
懐舊

懐舊

ぬきぬきの竹の葉のまじりては  
神祇

神祇

ぬきぬきの竹の葉のまじりては  
寄道祝言

寄道祝言

ぬきぬきの竹の葉のまじりては  
寄世祝

寄世祝

ぬきぬきの竹の葉のまじりては  
君入心

君入心

ぬきぬきの竹の葉のまじりては







夕圓法

居る光の心は夕の鐘の響くやうに法よりの心なる  
心静処静

爰鳴る道に花の影を人老るも心静かしの友なる

祝言

いづれも心なる友なる心静かしの友なる

恒事如友

いづれも心なる友なる心静かしの友なる

親王

いづれも心なる友なる心静かしの友なる

社松

いづれも心なる友なる心静かしの友なる

社頭祝

今年秋もまた心静かしの友なる

八幡

いづれも心なる友なる心静かしの友なる

玉清嶋

いづれも心なる友なる心静かしの友なる

北野

いづれも心なる友なる心静かしの友なる



住吉

とよみれ松のめづるうらみさるはくへてけうあつて

祇園

ねのし神のうら世と世のまいにあつていふさるるあつて

稲荷

いふさるるあつていふさるるあつていふさるるあつて

日吉

ねのねれ日吉のうら世と世のまいにあつていふさるるあつて

鐘聲行方

ねのねれ日吉のうら世と世のまいにあつていふさるるあつて

山

あつていふさるるあつていふさるるあつていふさるるあつて

漢雲遠晴

あつていふさるるあつていふさるるあつていふさるるあつて

松作友

あつていふさるるあつていふさるるあつていふさるるあつて

後若

あつていふさるるあつていふさるるあつていふさるるあつて

湖水眺

あつていふさるるあつていふさるるあつていふさるるあつて



山家煙

山とみの煙の末と見ても煙ありありもつらうまゝのな  
りて河

河

河のほとりまはるる水もいづれもたつたつと海の浪のまはる  
書

書

海もつとまはるる水もいづれもたつたつと海の浪のまはる  
雜

雜

海路  
いづれもたつたつと海の浪のまはる

海路

いづれもたつたつと海の浪のまはる

茶も園も海もつと見まはれ後湯をまよもの  
神なるの心と共独膳を中して

とまはるる水もいづれもたつたつと海の浪のまはる

雲浮野水

雲の浮く野の水もいづれもたつたつと海の浪のまはる

水郷草

水郷の草もいづれもたつたつと海の浪のまはる

後着

後着の草もいづれもたつたつと海の浪のまはる

入の流日也いづれもたつたつと海の浪のまはる



夕日きつりひきしれと物のみふふひならみいひぬりしき  
二宮院門迄もて社に祝意をいし事各  
よみゆるいし

あはるは神のみしりれむらふと花をぬきし世にむらへん  
紫花園の難波の梅盛はゆる河細川をぬ  
入るの事一枝とてゆる次はむらひしき  
くせし

あはる難波の門のたき代とてぬきし世にむらへん  
ぬき  
右にぬ入る

ふの乘れなる乃梅をよもむらひるきぬらぬ  
實相院准后信をよめうてゆる社にぬ  
り枝よむと神のうとぬはむらゆる

るぬらぬ神のうらむらぬらぬぬらぬぬらぬ  
ぬらぬ  
ぬらぬ

ぬらぬぬらぬぬらぬぬらぬぬらぬぬらぬぬらぬ  
ぬらぬ  
ぬらぬ  
ぬらぬ

ぬらぬぬらぬぬらぬぬらぬぬらぬぬらぬぬらぬ  
ぬらぬ  
ぬらぬ  
ぬらぬ

ぬらぬぬらぬぬらぬぬらぬぬらぬぬらぬぬらぬ  
ぬらぬ  
ぬらぬ  
ぬらぬ



將軍家法下知に施し為御成之河細川

とら舟入る熱中傳

あまのぬかひとまをれ松のひもあける代のたろくみと

あつせれ日世勢替昌念劉き務傳り

うらぬりいと深更まぬもあてしひ傳り

まうろ方ねとこの松のそま程さしきふ世乃ゆく末

きすの口ううくくもて迷祝詞ふ来唐

中法結くまゆと音為教りといふ也

ぬみま一果あらぬ吉中傳ならる方ね中あ

もも傳り返す

いふふ傳りもか各まきけり方の中心なるもた

出仕まの長つこまうて

長深の志の血彩をわらうそ神とあうく清うあるる

念のろく園人皇とあきあし傳りつる今

あわれらふ徳借り紙のうへにこま傳り

あつたのたれとまひは拾ふふあは園のゆあもあうる

昨日あま入る念果てうのうへに又月夜

具真傳りてわうとまうてあまを伝

えんもえんもま

あまのろく月のあつたもまあぬとわのまらあ



心身も相おきりふりてはたそと神も傳みく  
是谷乃下は三宮院の正統なるゆゑ  
宝徳院法印法印下人々経自花々此ら  
くふりし何

又月も下けりひりれりおのまは心ひりり花のふりき  
淨光院法印法印孝集世間稀なる者也  
陽光院法印法印之写起中合群借一日角  
灯下より合出写早不可出定外也定定

也是



右書存正自集心堅固度秘本校合之御不審多し始関於之

羣書類從卷第二百六十五



